

## CONTENTS

産総研つくばセンター  
平成22年度一般公開報告 第2弾

◆「実験から学ぶ堆積物重力流のひみつ」

◆「重力って!? とりあえず計ってみよう♪」

マダガスカルのパナアフリカン変動期  
深成変成岩類調査報告

地質標本館 夏の特別展  
「有珠火山—その魅力と噴火の教訓—」

地質標本館開館30周年と夏の行事

ジオネットワークつくばニュース8月号

新人紹介

スケジュール

編集後記

## 産総研つくばセンター 平成22年度一般公開報告 第2弾

先月号に引き続き、産総研つくばセンター一般公開の様子を紹介します。今回は地質分野の中でも特にハードコア系のチャレンジコーナーからの報告です。暑かった夏を偲びつつ、来年の企画の参考にいただければ幸いです。

### 「実験から学ぶ堆積物重力流のひみつ」

吉川 秀樹 (テクニカルセンター), 野田 篤・七山 太 (地質情報研究部門)

平成22年7月24日(土)に開催された産総研一般公開において、昨年度に引き続き「実験から学ぶ堆積物重力流のひみつ」と題したチャレンジコーナーへの出展を行った。このコーナーは、陸上の「地すべり・土石流」および海底の「乱泥流」等の重力流と自然災害の関わりを分かりやすく解説する5つの実験装置を準備した。

#### (1) 簡易式地すべり・土石流発生実験装置

長さ1m、幅30cmの木板に縁枠を付け、20度傾斜させた人工地盤を作成した。その上に砂を台地状に盛り、さらにおもちゃの家、木と人形を載せリアリティーを持たせた。そこに霧吹きで雨を降らせてもらい、地すべり・土石流を人為的に発生させ観察していただいた。この実験では、斜面の粗度、傾斜角と水分量によって地すべりの形態が大きく変化するので、事前に上手く地すべり面や地すべり地形が生じるように、実験条件を予め設定しておいた。特に今年度はアクリル板の仕切り板を作成して盛土を左右に分割し、表層から浸透する雨の影響のみの場合(表層崩壊)と地盤の亀裂に沿って地下水を人工地盤まで浸透させた場合(深層崩壊)で、崩壊の様式がどの様に異なるかを実験で再現した。

#### (2) 大型水槽を使った乱泥流発生実験装置

長さ120cmの実験水槽に水を張り、半割したアクリルパイプを斜め40度で水中に挿入して海底谷に見立て、そこに水と共に土砂を流し込み、乱泥流を発生させた(第1図)。この実験で海底谷出口から海底扇状地に至る海底地形を上手く再現出来た。今年度は事前にアクリル板を水槽底に沈め、乱泥流発生実験後、タービダイトを水中から取り出して直接観察できる様に工夫した。

#### (3) 回転型乱泥流発生装置「タービダイトタワー」

以下の装置は地盤の液状化実験装置「エキジョッカー」を参考に考案したものである。径65mm、長さ2mのアクリルパイプに粒径の異なるガラスビーズ3種類と水を封入して回転スタンドに固定した。これを適当な角度に傾斜させて、見学者にガ



写真1 大型水槽での乱泥流発生実験。今年度は、実験後、水槽底に溜まったタービダイトを引き上げて直接観察することができるように改善した。

ラスビーズが流れ下って生じた乱泥流を見せ、最後にパイプを垂直に立てて、タービダイトの級化構造を再現して見せた。傾斜角によって乱泥流の流速も自在に変えられる点がこの実験装置の長所と言える。

#### (4) 卓上平型乱泥流発生装置“タービダイトボード”

卓上平型の乱泥流発生装置タービダイトボードを昨年の一般公開で出展し関係者から好評を得た。今年度は、アクリル容器に封入する粒子について検討を行い、微小なガラスビーズを比較的多めに入れることによって、乱泥流を発生しやすく、見やすくなるように改善を加えた。

#### (5) 簡易乱泥流発生実験装置“タービダイトステッキ”

径21mm、長さ1mのアクリルパイプを加工し、両端に水漏れ防止のパッキンを入れたエンドキャップを取り付けた。パイプの中に、粒径5mmの細礫、粒径1mmの粗



粒砂、粒径0.1mmのガラスビーズを適当な割合で入れ、水で満たし、エンドキャップで封入した。この際、様々な種類や色の砂、砂鉄、ガラスビーズを入れて予備実験を繰り返したが、最終的には、10（細礫）：6（粗粒砂）：5（ガラスビーズ）の割合で粒子を混在させる設定が、程よいことがわかった。さらに、細礫のみ、粗粒砂のみの2本のステッキを別々に作り、2本同時に操作する事により、同じ傾斜角であっても粒径の違いで、乱泥流の流れ方や流下速度の違いが生じることを示した（写真2）。

一般公開当日、我々は室内ブースと野外実験の二手に分かれて実施した。主に吉川が担当した室内ブースでは、卓上平型乱泥流発生装置“タービダイトボード”と簡易乱泥流発生実験装置“タービダイトステッキ”が大人にも子供にも好評で、おもちゃ感覚で自由に見学者に触れてもらい、乱泥流の流下の様子を十分イメージしてもらえたと思う。

野外で行った地すべり・土石流、および水槽での乱泥流発生実験については主に野田が担当した。特に、低年齢層の見学者が「お砂場」感覚で参加し、長時間の滞在者や昨年来のリピーターも多数現れ、概ね子供には好評であった。また、今年度は、室内ブースと野外の実験会場の間に距離がなく、両者の連携は昨年以上に上手くいっていた様に思う。

写真2 二つの流れを比較できるタービダイトステッキ。会場では教育関係者から教材としての貸し出しの問い合わせがあった。

## 「重力って！？とりあえず計ってみよう♪」

岡田 真介・村田 泰章・住田 達哉（地質情報研究部門）

地質情報研究部門地球物理研究グループでは、「重力って！？とりあえず計ってみよう♪」と題して、重力を身近に理解してもらい、それが地質と深く関わっていることを理解してもらうために、産総研つくばセンター一般公開に出展した。

出展内容は、①重力計の下に、鉛の重錘（じゅうすい）を入れた時とそれを外した時の重力値の差を計測し、ニュートンの万有引力の法則を用いて、重錘の質量を求める。②重錘の体積を計算し、質量から密度へ変換する。③最後に、あらかじめ示しておいた金属の密度と比較することによって、重錘に用いた金属が何であったかを当ててもらうという実験であった（実験装置は写真1）。

このような実験を通して、計測装置が対象物に接触していなくても、重力値が変化することを参加者に理解してもらった。野外での重力測定風景およびその結果を示したパネルを用いて、実際に重力変化と地質構造が深く関わって

いることを説明した。

昨年度も同様の実験を行ったが、難しかったという意見が多く聞かれ、特に小学校低学年には、計算および実験の理解が難しかった。それらの意見を踏まえ今年度は、ニュートンの万有引力の方程式を用いると、なぜ質量が求められるのかを、動画を交えて丁寧に説明した（写真2）。また、穴埋め式の計算シートでは、同じ数値が入る四角は同じ色で塗る工夫をし、さらに計算の過程を上記の①～③のステップに明確に分けることによって、理解度の向上を期待した。

工夫の甲斐もあり、何を計測し、何を求めようとしているのかという実験の意図への理解が、昨年度に比べて大きく改善された。また、計算もよりスムーズに進んでいるように感じた。またジオドクトルのアンケートによると、「難しかったが、またやりたい」という感想が多く、計算や実験が難しかったことよりも知的好奇心が上回った結果



となり、一般公開としては成功したと感ぜられる。対象物に直接触れずに、重力を計ることによって、重錘の正体が分かってしまうことは、参加者にとっては非常に不思議な感覚であり、実験に興味を持ってもらえた結果であると思われる。

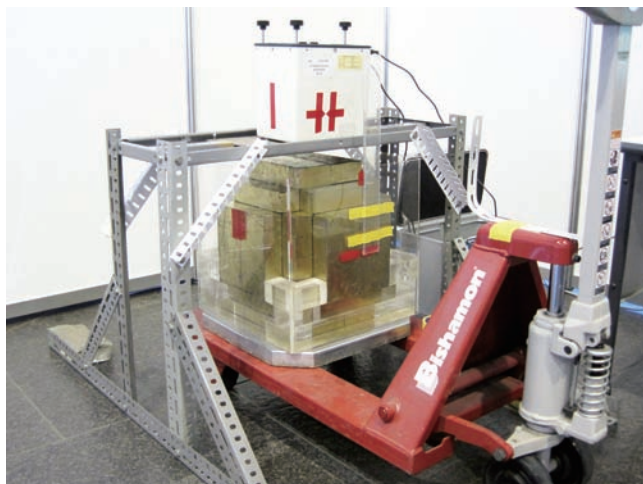


写真1 金色に塗装した鉛の重錘（中央）とその重力を測定する重力計（中央上）。重錘はハンドパレットにより引き出せるようになっており、重力計の数値は、モニターに出力されるようになってい。重錘と重力計は、接触していなくても重力値は変化する。

重力計は、大変高価であると同時に繊細な機器であるため、参加者に実験を手伝ってもらうことはできない。そのため、次回に向けて参加者が、直接触れられる実験を考えている。



写真2 熱心に説明に聞き入る参加者の様子。中島和敏氏撮影。

## マダガスカルのパナフリカン変動期深成変成岩類調査報告

高橋 浩（地質調査情報センター）、宮下 由香里（活断層・地震研究センター）、青矢 睦月（地質情報研究部門）

2010年7月16日～8月10日の日程で、マダガスカル南部の地質調査を行いましたのでその概要を報告します。日本は記録的な猛暑だったようですが、マダガスカルは南半球に位置しているため真冬で、首都のアンタナナリボ（標高 1,250 m）や調査地域（アンタナナリボ南方約 500km, 標高 800～400 m）は高地であるため低緯度（南緯 20°前後）の割には涼しく快適でした。治安も比較的良く、猛獣や毒ヘビもないようで、日本の夏の猛暑を避けて地質調査をするにはお勧めの国です。

今回の調査は、JICA プロジェクト「マダガスカル国鉱業振興のための地質・鉱物資源情報整備調査」の一環として、住鉱コンサルタント（株）との共同研究として実施されました。具体的には既刊の 10 万分の 1 地質図幅 8 枚の改訂のサポートが調査の目的です。マダガスカルでは、フランス人の Henri Besairie 氏を中心に各種スケールの地質図幅が作成され（1937-1970）、10 万分の 1 地質図幅 60 枚は全国土をカバーしています。これらの地質図は比較的良くできていますが、出版後の地球科学の進歩に伴って現代的な地質図に改訂する必要が出てきました。また、マダガスカルは約 3 億年前（石炭紀末期）にアフリカと分離し、約 9,000 万年前（後期白亜紀）にはインドと分離したと考えられており、 Gondwana 大陸の進化を解明するに

あたって重要な位置づけにあることから、世界の研究者に注目され、多くの研究成果が集積されつつあります。こうした背景もあり、我々は張り切って現地調査に臨みました（写真 1, 2）。

マダガスカルの地質は、中期～後期始生代（およそ 30 億年前）のアントンギル地塊、後期始生代～前期原生代（およそ 25 億年前）のアンタナナリボ地塊と原生代末期（およそ 6 億年前）の変成岩類から構成されています（Collins,



写真1 バオバブの木を背景に記念写真。  
アンドロヤンユニットとヒボリーユニットの境界付近。

2006 など). 今回調査したのは原生代末期の変成岩類でアンドロヤンユニットとボヒボリーユニットからなります. これらのユニットはざくろ石黒雲母片麻岩を主とする砂泥質の高変成度変成岩類主体で, 片麻状花崗岩類やこれら貫く塊状花崗岩類を伴っています. これらの深成変成岩類はおよそ6億年前のパンアフリカン変動時に形成されたと考えられていますが, 今回, アンドロヤンユニットとボヒボリーユニットの境界にはマイロナイト帯が確



写真2 ざくろ石珪線石黒雲母片麻岩に貫入する片麻状花崗岩の露頭調査

認できました. また, マイロナイト帯の東側には, ほぼ100%曹灰長石からなる斜長岩の岩株状岩体が存在し建材用に採掘されています(写真3). 今回の調査では大量の岩石試料を採取しましたので, 今後の顕微鏡観察や化学分析によって, 多くの新知見が得られるものと期待しています.

(引用文献) Collins, A.S. (2006) Madagascar and the amalgamation of Central Gondwana. *Gondwana Research*, 9, 3-16.



写真3 斜長岩の採石場

## 地質標本館 夏の特別展「有珠火山—その魅力と噴火の教訓—」

澤田 結基 (地質標本館), 東宮 昭彦 (地質情報研究部門)

地質標本館では, 7月21日から9月26日まで夏の特別展「有珠火山—その魅力と噴火の教訓—」を開催しました. この特別展は, 地質標本館と全国火山系博物館連絡協議会の所属博物館が連携して作成した巡回展で, 展示の作成には北海道大学総合博物館のご協力をいただいています. 巡回展は2009年6月, 立山カルデラ砂防博物館でスタートし, 雲仙岳災害記念館, 阿蘇火山博物館, 磐梯山噴火記念館で開催され, このたび地質標本館での展示を迎えました.

展示は3部に分かれています. 第1部「有珠火山について知る」の展示では, 有珠火山のおいたちや噴火活動の特徴について解説しました. 有珠火山は2万年前から1万年前にかけて形成された成層火山です. 長い休止期間を経て1663年, 噴出量が $2.5\text{km}^3$ に達する軽石などのテフラを伴う噴火を起こしました. その後は2~30年おきに噴火を繰り返し, 2000年の噴火は記憶に新しいところです. 噴火で生じた火山岩や軽石, 火山灰を展示しました(写真1).

有珠火山の山容は, 噴火の度に生じた溶岩ドーム(火口の上に粘り気の強い溶岩が盛り上がる)や潜在ドーム(溶岩が地表に出る前に上昇が止まり地形の隆起だけが生じ

る)の形成によって, 大きく変化してきました. 1943-45年噴火で生じた昭和火山は溶岩ドームの一例です. また, 2000年噴火でも潜在ドームが成長し, 国道や住宅地が大きく隆起しました. こうした複雑な地形を理解いただくために, 展示では赤青メガネを使った立体画像(アナグリフ)や, 赤色立体地図を使って地形を解説しました. また, 赤色立体地図を開発したアジア航測(株)の厚意によ



写真1 火山岩やテフラのほか, 火山ガスの観測で用いるCOSPECとその解説も展示しました.



り、赤色立体地図を印刷した立体地形模型も展示しました(写真2)。

第2部「火山との共生」では、2000年噴火の災害対応について紹介しています。2000年噴火では、周辺で生活する1万人の住民が噴火前に避難し、人的な被害を生じませんでした。避難成功の背景には、研究者と行政が連携し、住民との間に信頼関係を築くことができたことがあります。噴火活動の予測では、火山性地震のデータと過去の経験に基づき、的確に噴火時期を判断した北海道大学岡田弘教授のリーダーシップがありました。

しかし、5ヶ月にわたる避難生活は不便が多く、当事者にとって肉体的・精神的につらいものでした。展示では、避難所の様子を、写真パネルとともに、避難所の炊き出しのメニューを再現した食品サンプルで紹介しました。食品サンプルは、北海道大学総合博物館の特別展に合わせて作成されたものです。

噴火活動が終息した後は、有珠火山の災害や、温泉などの恵みを伝える活動の輪が広がりました。2000年噴火で生じた噴火口や破壊された建物は、それ以前の噴火活動の痕跡とともにエコミュージアムとして整備され、有珠火山の活動の様子を知ることができます。また、地域の子も達が昭和火山や大有珠に登って学習するプログラムも行われ、次世代へと記憶が継承されています。2008年12

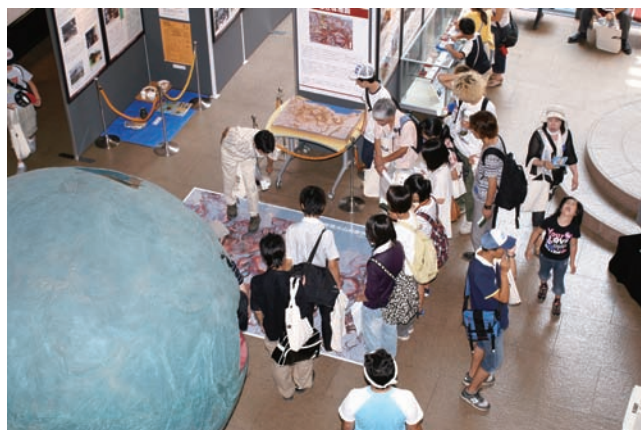


写真2 有珠山の赤色立体地図と立体模型では、有珠山の地形がわかりやすく表現されています。

月には日本初となる世界ジオパークに認定され、観光資源や学習素材としての利用が広がっています。なお、ジオパークについては、第3部「ジオパーク」にて別途詳しく解説しました。

これまで約1年にわたる巡回展によって、多くの方に有珠山の活動や、火山との共生を目指す地域の姿をお伝えすることができました。巡回展はひとまず地質標本館で当初予定分を終了しますが、今後も他の博物館での開催を検討中です。

## 地質標本館開館30周年と夏の行事

利光 誠一・吉田 清香・下川 浩一・青木 正博・澤田 結基・兼子 紗知・古谷 美智明・尾上 亨(地質標本館), 辻野 匠・兼子 尚知・川辺 禎久・中島 礼・中澤 究(地質情報研究部門)

結基・兼子 紗知・古谷 美智明・尾上 亨(地質標本館), 村上 浩康(地圏資源環境研究部門)

地質標本館は、今年8月19日に開館30周年を迎えました。そこで、8月の地質標本館行事を開館30周年記念関連行事として位置づけて開催しました。開館記念日の19日には、30周年ということで先着300名の方に北海道釧路市産の石炭サンプル(解説書添付)を差し上げました(写真1)。ささやかなプレゼントではありましたが、来館された方々には好評でした。

翌日の20日には、恒例の「地質標本館化石クリーニング教室」を開催しました。この体験学習イベントは、昨年より事前予約制の教室形式で開催しています。今年は午前6名、午後9名の申し込みがありました。参加者は30分ほどのビデオ鑑賞と事前レクチャーを受け、続いて1時間ほどの化石クリーニング作業を行い、最後にまとめの学習(化石鑑定など)を行いました。小学生が主体でしたが、皆さん熱心に栃木県那須塩原市産の岩石を割って木の葉化石を取り出すクリーニング作業に取り組みました(写真2)。地質標本館ホールでは、那須塩原市産木の葉石の原石

サンプル(クリーニング作業の解説書を添付)を100名の来館者に提供しました。この他に、手作りの記念シールも準備しました。あわせて、現世の木の葉をパウチしたものに紙をあてて鉛筆でこすりだしをする「リーフスクラッチ」のサブイベントも開催し、多くの方が体験されました。



写真1 開館30周年記念の石炭サンプルを選んでいるところ。

8月21日には、「地球何でも相談日」のイベントを開催しました。これは、小・中学生などの夏休みの自由研究のお手伝いを兼ねて、岩石・鉱物・化石などの鑑定に関する質問や疑問にお答えする定例行事です。当日は、朝から熱心な子供たちに混じって大人も標本持参で来館し、地質調査総合センターの研究者に質問をなげかけていました。相談内容としては、茨城県南部を中心とした岩石・鉱物・化石に加え、糸魚川、佐渡などの新潟県の鉱物、高知県の岩石、北海道の化石、さらには外国（台湾）の岩石などがありました。相談件数は、岩石7件、鉱物7件、化石10件でした。また、この日は、サブイベントとして、化石折り紙、化石の粘土模型（クレイモデル）作り、リーフスクラッチ、地盤の液状化簡易実験装置（エキジョッカー）及び砂の流動現象を見る小箱（砂変幻）の解説・実演などのコーナーを開設し、大勢の方に体験していただきました。

8月20日と21日の各イベントでは、地質標本館で博物館実習中の大学生の皆さんに体験参加者への指導をして

いただきました。一般来館者を相手に、最前線でサイエンスコミュニケーションの実習をすることができ、博物館実習生にとってもよい経験となったようです。



写真2 タガネを使って、木の葉の化石のまわりを覆う余分な石を取り除くクリーニング作業をしているところ。

## ジオネットワークつくばニュース8月号

古川 竜太・佐藤 由美子・宮崎 光旗・藤原 智晴・高橋 裕平・渡部 芳夫（地質調査情報センター）

### PROSUME2010に出展（8/7-8）

つくば産学官連携ネットワークの主催するPRO-SUME2010に出展しました。個人でもここまでできる！をコンセプトに、科学技術系のクリエイターを主役とするイベントです。Prosume（プロシューム）とは produce（生産）と consume（消費）を組み合わせた造語で、かの Alvin Toffler が「第三の波」で提唱した言葉です。現代の工業技術は極限までコモディティ化が進み、低コスト化したため、消費者の多様なニーズに応じる製品を消費者自身が作ることが可能になりつつあります。会場となった筑波大学には電子工作や科学技術の展示のほか、はんだ付けや基板設計に関するワークショップがありました（写真1）。ジ



写真1 会場となった筑波大学大会館。

オネットワークつくばからは筑波山に設置したフィールドサーバの紹介とデータのリアルタイム表示を行ないましたが、実物がなかったのが、あまり興味を引かなかったようです。この種のイベントではハンズオンの重要性を痛感しました。欧米でも自作にこだわる人が増えているようですが、ハンダ付けへのこだわりは手先の器用な日本人ならではの感じます。（古川）

### 第四紀学会ポスターサロンに出展（8/22）

学会というものに初めて参加しましたが、エネルギーあふれる地学分野の潜在的な大きな力を知りました。東京学芸大学のポスターサロン会場では空調がなく、様々な団体が放つ意欲の熱気で、体感温度は急上昇。遠方から参加し



写真2 ポスターサロンでは147件もの発表があり、熱気と酷暑でビールが飛ぶように売れていました。



た団体も多く、団体規模の大小にかかわらず、それぞれ工夫をこらした活動が紹介されました（写真2）。そのなかに子どものための「化石塾」があることには驚きました。最近はやいの科学塾が盛況ですが、これはニッチな地学教育における新しい形ではないでしょうか。より外に情報を発信・アピールして、地学を採用する高校が増えるといいですね。（佐藤）

### 第15回サイエンスカフェ（8/28）

夏休み最後の週末に子供向けサイエンスカフェ「大昔のつくばにはゾウがいたって本当？」を開催しました。会場の共用講堂ホワイエにはすっかり日焼けした子供たちと家族連れ、そしてゾウに興味のある大人が集まりました。

話題提供の中島 礼さん（地質情報研究部門）はすべての説明を大きな紙に書いて、子供たちに話しかけるようにしゃべります。

まずアジアゾウやアフリカゾウなど現世のゾウ、そしてマンモスやナウマンゾウなど絶滅したゾウの形や大きさを説明します。さらにゾウの骨格、特に歯の構造とそこから年齢がわかることなどを詳しく解説しました。古生物学者は解剖学者でもあるのです。

次にナウマンゾウの全身骨格が書かれた紙にトレーシングペーパーを重ねて、ゾウの身体の輪郭を書いてみます。ヒントは筋肉や内臓が必要な部分は厚く、筋肉が必要でない部分は骨に沿って書くことです。重い頭を支える首や、1日に100kg以上食べる胃袋が収まるお腹の部分は骨から膨らませて書きます。目と耳は骨に穴がある位置から想像できます。耳の大きさはどれぐらいでしょうか、寒いところのゾウは耳が小さくなります。皆さん、かなり苦戦し

たようで、古生物学者の苦勞がわかったと思います（写真3）。

その後はお待ちかね、古生物学者が描いたナウマンゾウの公開です。壁から実物大のナウマンゾウの復元図が降りてきました。ゾウの高さは2.5m近くもあり、その脇に立つと大きさが実感できました（写真4）。

ナウマンゾウはおよそ2万年前頃まで日本に住んでいた、つくばの花室川から多くの化石が見つかります。旧石器時代の遺跡が近くにあることから、人間と共存していた可能性が高いそうです。ナウマンゾウの牙や歯は大きいため化石として残りやすいのですが、木片などと間違われて報告されないことも多いようです。もし化石かもしれないと思ったら、中島さんに連絡してください。会場にはつくば周辺でみつかるゾウやクジラ、貝などいろんな生き物の化石が展示され、参加者は本物の化石を見てさわりながら、大昔のつくばの風景に思いを馳せたようです。（古川）

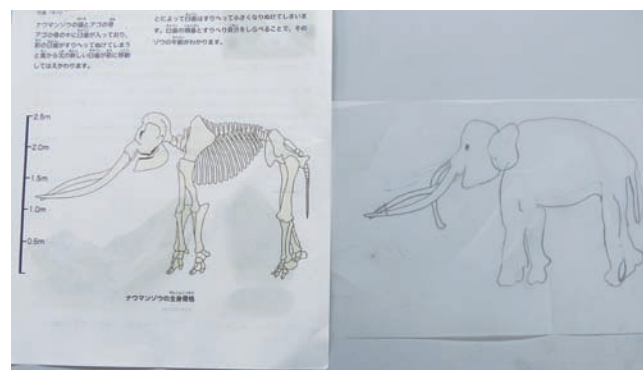


写真3 子どもが描いた復元図。間違いやすいのは足、耳、鼻など骨がない部分です。後から書き足した鼻が変なプロポジションになっています。



写真4 初公開！花室川の実物大ナウマンゾウ復元図。右側にいる司会の「花室太郎」さんはナウマンゾウを追いかけて花室川から来たそうです。

**板場 智史** (いたば さとし) (活断層・地震研究センター)



4月1日付で任期付研究員として、活断層・地震研究センター地震地下水研究チームに配属されました板場智史と申します。私は京都大学で学位を取得した後、2005年4月より、特別研究員等として産総研に在籍しておりました。

私のこれまでの研究内容を2つに分けて簡単にご紹介致します。一つは、主に歪を用いた地殻変動解析です。産総研では、ボアホール型歪計の記録を用いて、南海トラフ沿いで発生するスロースリップイベント(ゆっくりすべり現象)の解析を行っております。

もう一つは、地震時の地下水応答に関する研究です。地震が発生すると、断層運動に伴う静的体積歪変化等や、地震動による帯水層の透水層変化等によって、地下水位がしばしば変化します。私はこの中で地震動による変化について井戸ごとの特性を評価しました。これにより、近代的観測が行われていない過去の地震時の地下水変化のうち静的体積歪変化の寄与を見積もり、地下水変化から過去の地震像を推定できる事が期待されます。

今後は、これらの研究をより深化し、過去の現象と最新の観測結果を融合させて、東海・東南海・南海地震の短期予測精度の向上に取り組んで参ります。未熟者ではありますが、今後ともご指導のほど、よろしくお願い致します。

**行谷 佑一** (なめがや ゆういち) (活断層・地震研究センター)



4月1日付で産業技術人材育成型任期付研究員として採用されました。所属は活断層・地震研究センターの海溝型地震履歴研究チームです。すでに2007年4月から特別研究員として勤務させて戴いておりましたので、ご存知の方がいらっしゃると思います。

私は、歴史史料に残された記述を解釈し現地調査を行うことで、歴史時代に発生した地震による津波の高さ、浸水域、地殻変動量、および被害の状況などを明らかにする研究を行っております。その上で、その地震がどのような地震であったのかを知るために、津波浸水シミュレーションなどを用いて、対象とする地震のモデリングを行っております。これまでに、869年貞観地震や1703年元禄関東地震などを対象としてきました。このほか近年に発生した2007年能登半島地震や2007年新潟県中越沖地震などについても、観測津波波形を用いてモデリングを行っております。

今後も引き続き、日本海溝や南海トラフにおける海溝型地震などを対象とし、地形学や地質学などの分野の方々と連携して、海溝型地震のより詳細な履歴を明らかにしたいと考えています。いろいろとお世話になりますが、どうかよろしくお願い申し上げます。

スケジュール	
10月14日～15日	産総研オープンラボ <a href="http://www.aist-openlab.jp/">http://www.aist-openlab.jp/</a>
10月16日	地質標本館 野外観察会 (いわき市周辺)
10月17日	ジオネットワークつくば第7回野外観察会 「園内で見える筑波山の植物」と「水草を守る」 (筑波実験植物園)
10月17日～24日	CCOP (東・東南アジア地球科学計画調整委員会) 総会・管理理事会 (インドネシア・マナド)
10月27日	日本地震学会2010年度秋季大会(広島国際会議場)
10月29日	ジオネットワークつくば第16回サイエンスカフェ 「育まれるにおいの快不快」 (つくば エキスポセンター「レストラン滝」)

**編集後記**  
古川 竜太 (地質調査情報センター)

ジオネットワークの新しいキャラクターを紹介します

名前: 花室 太郎 (はなむろ たろう)

性別: 男

誕生日: 2万年前ぐらい

生息地: 花室川周辺

好きな食べ物: 貝, ナウマンゾウ

苦手なもの: 農業, 氷河期

アピール: 出演依頼お待ちしております



**GSJ Newsletter No.72 2010/9**

発行日: 2010年9月15日  
 発行: 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター  
 編集: 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査情報センター  
 脇田 浩二 (編集長)  
 古川 竜太 (編集担当)  
 管家 亜希子 (デザイン・レイアウト)  
 〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7  
 TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672

地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

地質調査総合センターホームページ  
<http://www.gsj.jp/>